

非行形態による関連要因の比較

— 非行傾向行為とインターネット逸脱行為 —

吉 田 光 希

問題・目的 中学生や高校生はいわゆる「思春期」と呼ばれる時期であり、この時期には様々な不適応が生じやすいとされている。中学生における適応上の問題の一つとして非行が挙げられる。

また近年では、インターネットの普及を背景として、少年たちの生活も大きく変わっている。総務省（2022）の統計によると、6～12歳のインターネット利用率は84.7%、13～19歳のインターネット利用率は98.7%となっている。インターネット上でのトラブルの経験を尋ねた令和3年度の内閣府（2022）の調査では、回答者3318人のうち43.3%の青少年が何らかのトラブルを経験していた。

これらの背景から従来の非行とインターネットを介した逸脱行為の2つに着目し、それらの背景要因として、「セルフコントロール」、「承認欲求」及び「空虚感」の各要因がどのように書く行為に影響を及ぼし、行為によって影響を及ぼす要因の違いがあるのかを検討することを目的とする。

方法 調査はGoogle Formを用いたWeb調査を実施し、得られたデータで分析を行った。調査期間は2023年7月から10月であった。本研究は、追手門学院大学研究倫理委員会の承認を受けて実施された（受付番号2023-11）。調査参加者は、近畿圏の私立大学に通う心理学関連の授業を受講していた大学生297名（男性99名、女性198名）であり、平均年齢は19.83歳（ $SD = 0.89$ ）であった。

結果・考察 承認欲求、セルフコントロール及び空虚感が非行傾向行為及びインターネット逸脱行為に与える影響を検討するためにロジスティック回帰分析（強制投入法）を実施した結果、非行傾向行為において、「セルフコントロール」及び「孤独感」に有意な影響が認められた。楽観的インターネットコミュニケーション因子及び情報モラル因子において、「賞賛獲得欲求」に有意な影響が認められた。これらの結果から、非行傾向行為とインターネット逸脱行為で影響を及ぼす要因が異なることが示された。自分自身を制する力の強弱や自分はひとりぼっちであるという認識が非行傾向行為に影響を及ぼし、誰かに認められたいという感情がインターネットを介した逸脱行為に影響を及ぼすということが言える。

インターネット上で新たに知り合った他者とやりとりをすることが問題であると言われると疑問が浮かぶのも事実である。インターネット上で知り合った他者とやりとりをしたり、実際に出会うことが必ずしも悪いことであるとは言えないが、強姦性交等の性犯罪や詐欺等の様々なトラブルに巻き込まれる危険性を孕んでいることは事実である。この点については、今後より吟味していく必要があると筆者は考える。